生駒経済論叢　第21巻第１号　2023年７月

ミルトンのソネット
――閉じられた庭と開かれた世界を繋ぐ作品群――

金　崎　八　重

概要　ミルトンの作品は，初期牧歌詩，中期政治的散文，後期長編叙事詩の三つに分けられている。これまで中期作品時代は，ミルトンは詩人としてではなく政治家としてのみ着目され，詩人ミルトンを論ずるにあたり，初期作品と後期作品の間に大きな断絶があった。本論では，ミルトンが政治活動をしていた時代にもわずかに書いていた詩作品であるソネット群を取り上げ，初期作品群と後期作品群をつなぐ存在としての意義を考察していく。

キーワード　ジョン・ミルトン，ソネット
原稿受理日　2023年５月15日

Abstract　Milton's works have been divided into three categories: early pastoral poetry, middle period's political prose, and late period's long epic poetry. During the period of Milton's political activity, Milton had been appreciated as a politician, not as a poet. In discussing Milton as a poet, there has been a big disconnect between his early and late works. In this paper, I will discuss Milton's sonnets, which are poems he wrote infrequently during the period of his political activities, and examine their significance as a link between his early and late works.

Key words　John Milton, Sonnet

１．は　じ　め　に

詩人ジョン・ミルトン（John Milton, 1608-1674）は生涯数多くの作品を書いたが，それらは後世の研究者たちにより，執筆時期と性質で概ね三つに分類されている。ミルトンが学生時代から清教徒革命に参加するまでに書いた短編牧歌詩群，共和国政府の要人であった時代に執筆した散文作品群，共和国政府が瓦解した後に執筆した長編叙事詩群である。

ミルトンの作品の中で「文学作品」として最も評価されているのは，もちろん『失楽園』（*Paradise Lost*, 1666-1674）であるが，ミルトンの生涯に渡る作風の変化を論じるにわたり，問題となるのが，中期作品群である。ミルトンは，30代の半ば頃から政治的闘争に身を委ね，政治や宗教等を論じたパンフレットを自主的に作成し，1649年にはクロムウェル（Oliver Cromwell, 1599-1658）のラテン語秘書官に任命され，外交官の役割を果たした。その後，1660年に王政復古が起こるまで，ミルトンは共和国政府のために外交文書を書き続け，政府の意向を民衆に伝え続けた。この時代の散文作品は，文学作品としてではなく，清教徒革命時代の思想を伝える歴史的資料として高く評価されている。従って，ミルトンの文学研究においては，「詩人」ミルトンは30代で一度消え，「政治家」ミルトンが現れ，50代になってから再び現れる，という，断絶が起こってしまっている。本論では，ミルトンが，政治活動をしていた時代にもわずかに書いていた詩作品であるソネット群を取り上げ，初期作品群と後期作品群をつなぐ存在としての意義を考察していきたい。

２．ミルトンのソネット

「ソネット」とは，13・14世紀頃にイタリアで書かれ始めた詩の形式の一種で，特定の脚韻を持つ14行詩である。16世紀には，詩人であり翻訳家でもあるトーマス・ワイアット（1503-1542）によってソネット形式の詩がイギリスにもたらされ，イギリスでも人気の詩のジャンルとなった。初期の英詩ソネットは，イタリアンソネットの影響が強く，フィリップ・シドニー（Philip Sidney, 1554-1586）の『アストロフェルとステラ』（*Astrophel and Stella*, 1580-84）に見られるように，（架空の）女性への愛情がテーマとなっていた。その傾向を変えたのが，恋愛や美，政治，死など幅広い題材についてソネットを書いたシェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）である。シェイクスピアのソネット集（*The*

Sonnets, 1609）は，イギリスのソネットを改革したとともに，その美しい押韻形式「abab cdcd efef gg」は，後世の詩人たちにも多大な影響を与えた。

ミルトンは，20代から50代にかけて，全部で23のソネットを残している。恋愛をテーマにした詩もあるが，シェイクスピアと同じく，幅広いテーマを扱っている。ただ，14行という短い行数で表現しなければならないソネット形式の詩は，ミルトンの作品の中では，完成度も評価もあまり高くないと言わざるを得ない。ミルトンは，長めの詩が得意な詩人である。初期の代表作品である哀歌『リシダス』（*Lycidas*, 1637）でさえも193行あり，後期の『失楽園』は12巻本にもなる。カタログ的に例を挙げ，修辞的表現を連ねるその作風は，冗長すぎるという批判も多いが，ミルトンが織りなす物語に説得力を持たせ，壮大な世界観を描き出すという点では，評価されている。

それに対し，14行詩ではその特徴を生かせないためか，ソネット作品群は，ミルトンの習作または実験作とみなされている。また，30年に渡って少しずつ書かれていることや，時事的なテーマも多いことから，日記のような性質を持つ，と論じられることも多い。

ミルトンのソネットを論じる上で多少混乱を呼ぶのは，全部で23のソネットがあるにもかかわらず，ミルトンは生前，19個のソネットのみしか出版していない点である。ミルトンは1645年に，初期の10個のソネットを収録した『ジョン・ミルトン氏の英語とラテン語の詩』（*Poems of Mr. John Milton, Both English and Latin*，以下1645年詩集と記す）を出版した。そののち，王政復古後の1673年には，残り９個のソネットを含むいくつかの詩を追加して，1645年詩集の再販という形で，２冊目の詩集を出版した（以下1673年詩集と記す）。以下にソネットのおおまかな内容と推定制作年を記す(1)。

ミルトンは，草稿では存在していた15番から17番と22番の４編のソネットを出版しなかった理由について，書き残していない。後世の研究者は，15番から17番は，クロムウェルを始め共和国政府の重要人物を褒めたたえる詩であったため，王政復古後にはとても世に出せるものではなかったからではないか，と論じている。22番の失明についての詩は，政治的には全く問題無いため，なぜ収録されていないのかについて議論が分かれているが，19番の詩とテーマが同じであるため，ミルトンはより完成度が高い19番のみを収録したのではないか，と推測されている。

(1)　ミルトン自身が出版する際にソネット作品に割り振った番号と，ミルトンの死後，編集者が詩集未収録の４作品も含めて出版する際にソネット形式の全作品に改めて割り振った番号は，異なる。現代では，編集者が割り振った番号に則って作品を論じることがほとんどのため，本論でもその番号を用いることとする。

No.	収録	推定制作年	内容
1	1645年詩集	詳細不明 1629年頃？	ナイチンゲールによせて
2			［イタリア語］恋愛詩
3			
4			
5			
6			
7		1631	過ぎ去る時の速さ
8		1642.11?	都市の襲撃
9		1643?	とある令嬢を讃える詩
10		1642?	マーガレット・レイ夫人を讃える詩
11	1673年詩集	1647?	ミルトンの著作に対する批判への返答
12		1646	
13		1946.2.9	友人・作曲家ヘンリー・ローズに贈る詩
14		1646.12	キャサリン・トマソン夫人への哀歌
15	**未収録**	1648～9?	**フェアファックス将軍の偉業を讃える詩**
16		1652.5	**クロムウェルを讃える詩**
17		1652?	**ヘンリー・ヴェイン将軍を讃える詩**
18	1673年詩集	1655?	ピエモントの虐殺について
19		1652～6?	失明について
20		1655?	エドワード・ロレンスを讃える詩
21		1655?	シリアック・スキナーを讃える詩
22	**未収録**	1655～6?	**スキナーに失明について語る詩**
23	1673年詩集	1658	死別した妻への哀歌

３．1645年詩集のソネットと初期牧歌詩

まず，1645年詩集のソネットをみていきたい。ミルトンのソネットは，1645年詩集に収録された作品と，1673年詩集の作品では，テーマがかなり異なっている。その中でも特に，

ミルトンが20代の時に書いた１番から８番は，イタリアソネットの影響が強いものとなっている。代表例として，ここではソネット１番を取り上げる。

O nightingale, that on yon bloomy spray
Warblest at eve, when all the woods are still,
Thou with fresh hope the lover's heart dost fill,
While the jolly hours lead on propitious May,
Thy liquid notes that close the eye of day,
First heard before the shallow cuckoo's bill
Portend success in love; O if Jove's will
Have linked that amorous power to thy soft lay,
Now timely sing, ere the rude bird of hate
Foretell my hopeless doom in some grove nigh:
As thou from year to year hast sung too late
For my relief; yet hadst no reason why,
Whether the Muse, or Love call thee his mate,
Both them I serve, and of their train am I. （*Sonnet I*）

まずはミルトンのソネットを，形式面からみていきたい。先に述べたように，イギリスのソネットは，Quatrain（４行連）が３つと Couplet（２行連）で構成された abab cdcd efef gg の脚韻を持つシェイクスピアソネット形式が代表的であるが，ミルトンのソネットは全て，Quatrain が２つと Tercet（３行連）が２つのペトラルカ風イタリアンソネット形式になっている。韻はあまり形式に則っておらず，前半の８行の脚韻は abba abba を守っているものの，後半の６行は詩によって様々で，cdc dcd，cde cde，cde dce などが混ざっている。シェイクスピアソネット形式では，韻が示すように最後の２行で詩を完結させようとする意図が強いのに対し，ミルトンのソネットは，前半の８行で述べた詩のテーマを，後半の６行でさらに修飾句をつけて別の表現で補強するか，もしくはミルトンの意見や願いが述べられている場合が多く，かなり異なっている。

このソネット１番でも，最初の８行では，恋を歌うナイチンゲールの声の素晴らしさが描かれたのち，後半では，恋の成就を告げるその歌声をいつもより早く聞かせてほしい，というミルトンの願いが述べられている。シェイクスピアソネット形式に比べ，ミルトン

のソネットは，一つの物語が綺麗に完結しているわけではなく，あるテーマや主張を単に説明しただけであり，散漫な印象を受けてしまう。ただ，逆に言うと，一つのテーマが繰り返し，より強固に述べられており，作品ごとのテーマを読者に強く印象付けることに成功しているともいえる。ミルトンのソネットは，自己主張が強いものであるともいえるだろう。

次に，内容面からみていきたい。ミルトンは少年時代，ローマ詩人ヴェルギリウスの牧歌に多大な影響を受けていたが，このソネット１番も「ナイチンゲールが恋の歌を囀る」テーマが選ばれているという点で，典型的な牧歌世界に則っているといえる。また，ローマ神話の神 Jove（l.7）や詩神 Muse（l.13）など，牧歌で良く使用されるモチーフも使用されている。内容面では，伝統的なパストラルから逸脱しておらず，詩の表現もたいして独創的ではないが，「夜の静けさの中で」鳥の声が響くという着想は，後の詩につながっており，その点では評価できるともいえる。ミルトンの初期詩の中では比較的評価が高い『沈思の人』（*Il Penseroso*, 1632）に，ソネット１番を発展させたような表現が出てくる。ソネット一番では“Nightingale”（l.1），“eve”（l.2）と，直接的な単語が使用されているが，『沈思の人』では“Less Philomel will deign a song, / In her sweetest, saddest plight,/ Smoothing the rugged brow of Night”（*Il Penseroso*, l.56-58）と，より凝った表現になっている。ソネット１番は，ミルトンの単なる実験作であったかもしれないが，若きミルトンの試行錯誤がみてとれる点では意義があるだろう。

1645年詩集の中から，もう一つ，ソネット８番を取り上げたい。ミルトンが30代になって初めて書いた８番は，初期作品と中期作品の境目の時期に書かれたもので，転機となった詩でもある。

一つ前のソネット７番は，ミルトンの23歳の誕生日に書かれた詩で，「過ぎ去る時の速さに比べて内面の成長が追い付かない自分へのあせり」がテーマとなっており，若者らしい悩みが綴られている。その後，ミルトンは仮面劇『コウマス』（*Comus* 1634），『リシダス』等で有望な詩人として一定の評価を得たからか，ソネットは書いていなかったが，それから11年たってソネット制作を再開したのである。

ソネット８番は，ミルトンが本格的に政治活動に身を投じることとなった「イングランド宗教改革論」（*Of Reformation in England*, 1641）の出版の１年後に制作されている。「都市への襲撃が計画された時」（*When the assault was intended to the City*）というタイトルがつけられており，ソネット７番までとは異なり，時事的な事柄がテーマとなっている。国王軍と議会軍がエッジヒルの戦いで本格的に衝突した後，国王軍が議会派を支持していた

ロンドンに進軍しているという噂が流れ，市民が怯えている，という状況の中で書かれた作品である。

Captain or colonel, or knight in arms,
Whose chance on these defenceless doors may seize,
If deed of honor did thee please,
Guard them, and him within protect from harms,
He can requite thee, for he knows the charms
That call Fame on such gentle acts as these,
And he can spread thy name o'er lands and seas,
Whatever clime the sun's bright circle warms.
Lift not thy spear against the muses' bower,
The great Emathian conqueror bid spare
The house of Pindarus, when temple and tower
Went to the ground: and the repeated air
Of sad Electra's poet had the power
To save the Athenian Walls from ruin bare.

（*Sonnet VIII. When the assault was intended to the City*　下線は筆者による）

国王軍の司令官や将軍に語りかけた詩で，（都市の）中にいるのは，名を大地に海に広めることが出来る人間だから，襲わないで欲しい，という内容である。作中では，一人称の“I”ではなく，三人称の“them”（l.3）“him”（l.3）が使用されているものの，明らかに，ミルトン自身のことを「守ってほしい」と願っている形になっている。真剣に依頼している詩ではなく，単に詩の題材として「都市の襲撃」を使用しているともいえるが，すでに議会派への支持を表明していたミルトンとしては，かなり弱気な立場を取っており，当時のロンドン市民の慌てぶりを見る歴史的資料としての観点からも，興味深い作品であるといえる。

またこの詩は，ミルトンの詩作の変化からみても注目すべきがある。ソネット１番は韻を揃えるだけでも精一杯という感じであったが，ソネット８番では，第１連の“arms”（l.1）と“harms”（l.4），第３連の“bower”（l.9）と“tower”（l.11）など，押韻だけでなく意味も関連した語になっており，ソネットとしての完成度が上がっている。

また，空間の対比もソネット一番よりうまく描写されている。詩人自身が閉じこもりたい場所であり襲撃しないで欲しい場所は，“house”(l.11)，“temple”(l.11)，“tower”(l.11)といった閉じられた空間が挙げられているが，名声が広まっていく場所としては“lands and seas”(l.7)，“clime the sun's bright circle warms”(l.8)と，どこまでも広がる世界が対比として描かれている。その点では，ミルトンは，この作品で伝統的なギリシャ•ローマ牧歌の形式からの脱却に成功している。伝統的な牧歌で描かれる理想郷アルカディアは，閉じられた世界で，美しい牧草地帯が広がっているが，「果て」である海にはほとんど言及されない。閉じられた世界である，「塔やあずまやの中で詩人が生活する」という表現もよく牧歌で描かれるが，太陽がめぐる場所ならばどこでも，という世界の広大さをイメージさせる表現もほとんど無い。

ソネット７番までは，ミルトンは，牧場や森といった閉じられた場所で愛や，恋や，個人的な悩みを述べるのみであったが，ソネット８番からは，テーマも時事的になり，より広い世界を描いている。ミルトンが，後期の叙事詩に近づく表現を用いることがでるようになっているともいえる。

４．1673年詩集のソネットと後期叙事詩

1673年詩集からは，３つの詩をとりあげたい。

ソネット12は，ミルトンが，1643年から1645年に渡って出版した離婚に関するパンフレット４編（*The Doctrine and Discipline of Divorce, The Judgment of Martin Bucer, Tetrachordon, Colasterion*）に対して起こった激しい批判に対して，反論した詩である。ミルトンは生涯３回結婚し，２人の妻と死別している。良く言えば繊細，悪く言えば気難しかったと言われているミルトンは，当初，結婚生活がうまくいっていなかった。最初の妻で，1642年に結婚した，ミルトンより17歳年下のメアリー・パウエル（Mary Powell，1626?-53）には，結婚生活１ヶ月で逃げられ（後にメアリーと和解し一男三女をもうける），失意の中，前述の離婚の正当性を述べたパンフレットを４編も書いた。17世紀当時，長老派にとって離婚などは言語道断であり，ミルトンを激しく非難し，パンフレットを焚書処分にしようとした。ミルトンはソネット11と12を書き反論したが，そのような批判によほど腹がたったのか，どちらもほぼ同じテーマであるにもかかわらず，二つとも1673年詩集に収録している。草稿の段階では，ソネット12の方が先で11が後に書かれてはいるが，12の論調があまりにも激しすぎるからか，詩集に掲載された際には順番が逆になっている。ここではソ

ネット12の前半のみ取り上げる。

I did but prompt the age to quit their clogs
By the known rules of ancient liberty,
When straight a barbarous noise environs me
Of owls and cuckoos, asses, apes and dogs.
As when those hinds that were transformed to frogs
Railed at Latona's twin-born progeny
Which after held the sun and moon in fee.
But this is got by casting pearl to hogs; (*Sonnet XII* 1-8)

ここで注目すべきは，ミルトンが，フクロウやカッコウに加えて，ロバやサル，犬，カエル，ブタといった動物を列挙して，長老派を批判している点である。ソネット１でも，幸運や恋を運ぶナイチンゲールの対になる存在として，「カッコウ」を引き合いに出していたように，悪しき存在としてカッコウを描くことはミルトンとしては良くあることでもある。ただ，ミルトンはこの12番の以前の詩作品では，愚かな一般大衆を「羊」と表現することがほとんどで，これらの動物を例に挙げたのはほぼ初めてと言ってもいいだろう。ロバ，サル，ブタはまだ，一般的に，頭の悪い動物とみなされることが多いが，カエルが詩で登場することは特に珍しいともいえる。これは，『失楽園』にもつながる。『失楽園』ではサルやブタは出てこないが，12巻で，人類がこれから巻き込まれるおぞましい状況についてミカエルがアダムに説明している部分で，“Frogs, lice and flies must all his palace fill / With loathed intrusion, and fill all the land;”（*Paradise Lost* XII, 177-8）と，カエルが書かれている。また，10巻では“See with what heat these dogs of hell advance / To waste and havoc yonder world,”（*Paradise Lost* X, 616-7）と，地獄の犬ども，という表現が出てくる。細かい表現ではあるが，ソネット12番のカエルや犬は，後期作品にも影響を与えているともいえるだろう。

次に，ミルトンのソネット群では最も有名といえる，失明について語られたソネット19をみていきたい。

When I consider how my light is spent,
Ere half my days, in this dark world and wide,

And that one talent which is death to hide,
Lodged with me useless, though my soul more bent
To serve therewith my maker, and present
My true account, least he returning chide,
Doth God exact day-labour, light denied,
I fondly ask; but Patience to prevent
That murmur, soon replies, God doth not need
Either man's work or his own gifts, who best
Bear his mild yoke, they serve him best, his state
Is kingly. Thousands at his bidding speed
And post o'er land and ocean without rest:
They also serve who only stand and wait.　（*Sonnet XIX*）

ミルトンは，失明して以降は，想像で描くようになったためか，色の名前を強調したり，木々や花の名前の固有名詞を初期詩よりもさらに多用するようになったりと，修辞的に風景を描くようになっていく。このソネット19番も，失ってしまった「光」と目の前に広がる「闇」の対比が美しい詩である。初期詩では，ミルトンは閉じた世界を描いていたが，“wide”（l.2）とあるように，ミルトンがここで描く世界は闇に覆われてはいるものの，果てはない。また，天使は神の命ずるままに“land and ocean”（l.13）と，地と海をかけまわっており，世界が開かれていることが分かる。

最後に，ミルトンの最後のソネットであるソネット23番をみていきたい。ミルトンとの結婚後わずか10ヶ月後，長女出産時に夭折してしまった２番目の妻キャサリン・ウッドクック（Katharine Woodcoock, ?-1658）への，ミルトンの切なる想いが書かれた美しい哀歌である(2)。最後のソネットだけあって，ソネット群の中では最も完成度が高い，と評価されている詩でもある。

Methought I saw my late espoused saint
Brought to me like Alcestis from the grave,
Whom Jove's great son to her glad husband gave,

(2)　死別した最初の妻メアリーに捧げた詩である，という説もある。

Rescued from death by force though pale and faint.
Mine as whom washed from spot of childbed taint
Purification in the old Law did save,
And such, as yet once more I trust to have
Full sight of her in heaven without restraint,
Came vested all in white, pure as her mind:
Her face was vailed, yet to my fancied sight,
Love, sweetness, goodness, in her person shined
So clear, as in no face with more delight.
But O as to embrace me she inclined,
I waked, she fled, and day brought back my night. （*Sonnet XXIII*）

哀歌は，まず，詩人が，親しい人を亡くした悲しみを述べ，故人がいかに素晴らしい人物であったかを語ったのち，故人が天に迎え入れられたのだからこれ以上悲しむことはない，と喜んで終わるのが通例であるが，このソネットは，その形式から逸脱している。最後の一行では“day brought back my night”（l.14）と，詩人が悲しみに満ちた現実に引き戻されており，伝統を否定している。また，この詩では，亡くなった人の業績や性格を仰々しく讃えるのではなく，“washed from”（l.5），“Purification”（l.6），“white, pure as her mind”（l.9）と，浄化や白といった，透き通るような表現で，亡くなった妻を讃えている。その点でも，異例ともいえる。従来の伝統を否定し，新しい詩を作ろうとしている点で，ミルトンの挑戦がみてとれる。

5．ま　と　め

これ以降，ミルトンは14行のソネット形式を捨て，『失楽園』，『闘志サムソン』（*Samson Agonists*, 1671）といった，長編叙事詩の世界へと旅立って行く。ソネット群からは，『失楽園』の最後で，アダムとイブが，閉じられたエデンの園から開かれた世界に足を踏み出すかのように，ミルトンが，ソネット１番の閉じられた牧歌世界から，広い世界に出て行く様子がみてとれる。ソネット群は，全体的にあまり完成度が高いとはいえないものの，初期作品から後期作品へのミルトンの作風が変化していく過程を伺うことができる点で，重要といえるだろう。

参　考　文　献

〔１〕 Blanchard, Jane. “Milton’s Tributary Sonnets X and XXI” *The Journal of the Midwest Modern Language Association* 44 (2011): 1–11.
〔２〕 Burt, Stephen, and David Mikics. *The Art of the Sonnet*. Cambridge: Harvard University Press, 2010.
〔３〕 Lobo, Giuseppina Iacono. “John Milton, Oliver Cromwell, and the Cause of Conscience” *Studies in Philology* (2015): 774–797.
〔４〕 McDowell, Nicholas. “Dante and the Distraction of Lyric in Milton’s ‘To My Friend Mr. Henry Lawes’” *The Review of English Studies* 59 (2008): 232–254.
〔５〕 Milton, John. *Milton Complete Shorter Poems*. Ed. John Carey. 2nd ed. Essex: Longman, 1997.
〔６〕 --- *Milton Paradise Lost*. Ed. Alastair Fowler. 2nd ed. London: Routledge, 2007.
〔７〕 --- *The Complete Poetry and Essential Prose of John Milton*. Ed. William Kerrigam, John Rumrich and Stephen M. Fallon. New York: Modern Library, 2007.
〔８〕 Schlueter, Kurt. “Milton’s Heroical Sonnets” *Studies in English Literature, 1500-1900* 35 (1995): 123–136.
〔９〕 Teskey, Gordon. *The Poetry of John Milton*. Cambridge: Harvard University Press, 2015.